



横井小楠 —その業績と生涯—

今年は、わたしたちの住む熊本に生まれた横井小楠の生誕200年にあたります。小楠は、幕末(江戸時代の末期)に日本の進む道を示した偉大な思想家の一人です。交流があった勝海舟^{かつ かいしゅう}は、小楠を次のように言っています。「おれは今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲^{さいこう なんしゅう}(隆盛)とだ。横井は西洋の事も別に澤山^{たくさん}は知らず、おれが教へてやった位だが、その思想の高調子な事は、おれなどはとても梯子^{はしご}を掛けても及ばぬと思った」(『氷川清話』より)

海舟にそのように言わせた、横井小楠はどんな人物だったのでしょうか。

1 小楠誕生

横井小楠は、文化6年(1809)8月13日、家禄^{か るく}※150石の肥後藩士^{はんし}であった横井大平時直^{たい へいとき なお}の二男として熊本城下内坪井で生まれました。母、兄、弟の5人家族でした。本名は時存^{とき あり}ですが、ふだんは平四郎^{へい しろう}と呼ばれていました。

横井家の先祖は鎌倉幕府の執権(将軍の補佐^{ほうじょう})北条氏^しと言われていいます。小楠の肖像画の袴には横井家の「丸に三ツ鱗^{み つうろこ}」の紋が付いていますが、これは北条氏の家紋と同じです。

小楠が生まれた内坪井(現在の内坪井町)は、熊本城の北東の方角にあります。今は、その東側を坪井川が流れていますが、その当時は、かぎ形をした濠^{ほり}(現在は坪井川)が所々にあって、川(もとの坪井川)が西側を蛇行^{だこう}している、中級家臣^{か しん}の多く住む武家屋敷でした。生家は町の中心部(現在の熊本中央高校付近)にありました。

ところで、小楠は畏斎^{い さい}・小楠^{しょうなん}・沼山^{しやうざん}という3つの号(本名以外の名)を持っています。最も知られている号「小楠^{こ だ}」は、南北朝時代に後醍醐天皇^{ご てん のう}に仕えて足利尊氏^{あしかが たかうじ}と戦った楠木正成^{くすのき まさしげ}の子ども正行^{まさつら}(小楠公)を慕って付けられたと言われていいます。

さて、当時の政治情勢はどうだったでしょうか。将軍は第11代徳川家斉^{とくがわ いえなり}、肥後藩主は第10代細川斉茲^{ほそかわ なりしげ}でした。江戸幕府も200年を経過して、幕府の統制力も弱くなり、肥後藩も財政的に厳しい状況

でした。一方、日本近海にはロシア船やイギリス船がひんばんに出没するようになり、外国との関係も問題になる時期でもありました。

※勝海舟(1823~99)...

幕臣(旗本)^{はくしん}。1860年、咸臨丸^{かんりんまる}を指揮して日本人初の太平洋横断に成功。また1868年には西郷隆盛^{さいこう りんせう}と会見して江戸城無血開城を実現。

※家禄...

家に代々伝わる年俸^{ねんぽう}(給料)。石高で表わした。



▲横井小楠肖像画



▲小楠生誕地(熊本中央高校正門)

横井小楠 —その業績と生涯—



江戸時代、武士の子どもは、武芸(けんじゆつ)や儒学(じゆがく)、礼儀(れいぎ)など文武両道を身につけなければなりません。肥後藩士の子として生まれた小楠は、それらを藩の学校「時習館」で学びました。時習館での小楠の学習の様子や成果はどうだったのでしょうか。



▲時習館跡(熊本城二の丸)

2 時習館に学ぶ

小楠は8歳の時、藩校時習館に入学します。時習館は、第8代藩主※細川重賢がつくった肥後藩の学校で、宝暦5年(1755)の正月に開校しました。時習館には、①学問所と武道所があり、文武両道を学ぶことができます。②藩士の子もだけでなく、農民や町人の子どもでも優れた者は入学できる。③試験制度があり、合格すると上級の学科で学ぶことができます。④成績優秀者は藩の費用で寮に入って勉強ができる、などの特色がありました。

熊本城二の丸にあった時習館の敷地は南北に長く、正門のある南側に武道所「東榭・西榭」があり、中央から北側にかけて学問所がありました。初等科に入学した小楠は、中央にあった「習書齋」で習字を習い、「句読齋」で素読(音読)を学びました。中等科に上がると「蒙養齋」で、グループによる※儒学の古典の読み合わせをしたり、先生の講義を受けたりしました。このほか、礼儀作法や数学、音楽などの学科もありました。14歳のころ、水道丁(現在の安政町)に引っ越した後も勉強に励み、15歳の時には、藩から「句読・習書」や詩作の成績が優秀」ということで褒美をいただいています。このころから、小楠は希望する武芸師範に入門し、武道所で武術の鍛錬を行うようになりました。

また、時習館では試験に合格すると、一番北にある講堂「尊明閣」で高等の学問を学ぶことができ、小楠も試験に合格しました。21歳の時には、第12代藩主斉護から「学問数年よく進み、居合も上達

し、槍術・游(水泳)も心がけがよい」と褒められています。

講堂生の中で成績優秀な者は、居寮生に選ばれ、敷地の東側にある寄宿舎「莠莠齋」に入ることができます。小楠は25歳になった天保4年(1833)に居寮生に昇進し、同7年には居寮生世話役に任じられました。また、藩主より紋付上下(袴)一具も与えられています。さらに、同8年(1837)2月、その中で最も優秀な者が就任する居寮長に抜擢され、米10俵が支給されました。小楠29歳の時のことです。

※細川重賢(1720～85)...

第8代(肥後藩では第6代)藩主で明君といわれた。堀平太左衛門を登用して財政などの再建に取り組み、「宝暦の改革」を行った。

※儒学...

古代中国の孔子の教え(仁や礼)をもとにした学問。



▲時習館(南西側から見る)
「熊本城復元模型」天守閣展示より



▲小楠旧居跡(安政町)

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



とくがわ いえ やす ばく ふ
1603年に徳川家康が幕府(将軍が政治を行う役所)をつくって以来、江戸は日本の政治の中心地となりました。約260年間続いた江戸時代には、幕府や各藩から選ばれた有能な青年たちは江戸に集まり、学問に励みました。小楠も肥後藩の推せんにより江戸に留学しましたが、どんな人たちと出会ったのでしょうか。



▲小楠が通った熊本～江戸(豊後路)のコース

3 江戸留学

小楠に肥後藩より江戸留学を命じるとの報せが届いたのは、天保10年(1839)3月、31歳の時です。当時、藩では自由に留学することは許されず、藩命を受けて留学できることはたいへん名誉なことでした。小楠はさっそく旅装を整え、3月末に江戸へ旅立ちます。熊本城下を出発した小楠は、大津・阿蘇を経て豊後路(現在の大分県)を通り、鶴崎(肥後藩領・現在の大分市)に着きました。鶴崎では、当時郡代*であった兄の時明と久しぶりに会い、語り合ったといひます。鶴崎港からは船で瀬戸内海を渡って大坂・京都に行き、東海道を通って、4月中旬に江戸に着きました。

さて、小楠の江戸留学の目的は、天下の大学者を訪ねて講話を聴き、諸藩から江戸に來ている優れた人たちと知り合って、意見を交わすことでした。5月に入ると、大学者の訪問を始めますが、江戸で特に優れている人物として、松崎慊堂や藤田東湖を挙げています。

松崎慊堂は肥後国出身(現在の御船町生まれ)の儒学者です。当時69歳の慊堂について小楠は「学問が広くて深く、知識が豊富です。性質も穏やかな人です」と言い、江戸に居る学者では慊堂が最高と評しています。

藤田東湖は、徳川御三家である水戸家の藩士です。藩主徳川斉昭のそばに仕えて藩政改



▲松崎慊堂(御船町提供)

革などに力を尽くし、その思想は尊王攘夷派*に影響を与えた人です。小楠は東湖のことを「話しぶりがさわやかで、優れた意見を持ち、理論より事実を大事にしている。東湖のような人物は他にいない」と激賞していて、たびたび訪問しては語り合い、気心の合う間柄であったようです。

12月25日、水戸に帰る東湖は忘年会を催し、小楠はじめ諸友を招きました。小楠はその席上で、「今夜は国を憂える同志の集まりであるから、率直に政治論をたたかわせよう」と言い、酒を飲みながら論じ合いました。ところが、翌11年2月9日、突然、肥後藩江戸留守居役*から小楠に帰国の命令が下りました。その理由は、先の忘年会の帰りにさらに酒を飲み重ね、藩外の者とトラブルを起こしたからだといひます。酒による過失が原因で志半ばに江戸を去ることとなったのです。

※郡代…郡を治める藩の役人

※尊王攘夷派…天皇を尊び、外国を排除する考えをもつ人々

※江戸留守居役…幕府と大名諸家などの連絡や交渉、情報収集に当たる藩の役人



▲藤田東湖
(茨城県大洗町提供)

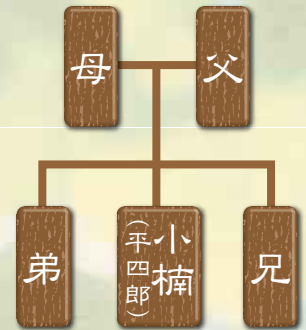
このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



武士の家庭では、家の跡継ぎになる総領息子(主に長男)は大事にされましたが、二男、三男は「厄介者」(世話のかかる人)とが「部屋住み」と呼ばれていました。江戸留学を1年足らずで帰国させられた小楠は、兄の厄介者になり、貧しい暮らしをしなければなりませんでした。そういう暮らしの中で、小楠はどのような学問を志したのでしょうか。

横井家(家系図)



4 小楠の苦学修養

横井家では、小楠が時習館で学んでいた23歳の時、父がなくなり、2歳上の兄が跡を継いでいました。

江戸から帰国した小楠は、肥後藩から70日間の逼塞(昼間は外出禁止)の罰を受け、兄の世話になりながら、水道丁(現在の安政町)の自宅で過ごさねばなりませんでした。

しかも、当時の肥後藩は大変な財政難で、各藩士の俸給は減らされ、家禄150石の横井家も実収入が減り、家計は赤字続きでした。そのころの小楠の生活ぶりは次の様だったといわれています。「兄の家の6畳の間で謹慎しましたが、その部屋の畳は破れ、壁はボロボロにくずれ、雨戸がないのでわらむしろを軒からつり下げて雨風を防ぎ、縁側は青竹を束ねてありました。下男は1人いましたが、手不足なので、平四郎(小楠)は時には飯炊き、水汲みなども手伝いました。」(徳富蘆花※著『竹崎順子』より)

小楠はそういう状況のなかで、江戸留学中の酒による失敗を反省すると共に、これまでの学問を整理し、自らの実践に重点をおく朱子学の研究に没頭しました。

朱子学は、中国の宋の時代に朱子※によってあらたにまとめられた儒学の一派です。朱子学では、君と臣・父と子などの上下関係についてそれぞれの身分を守るべきだとする名分や社会での順序や決まりがきちんと整う秩序を強調し、礼儀作法を重んじました。これらは幕府や諸藩の受け入れるところとなり、朱子学は盛んにな

りました。

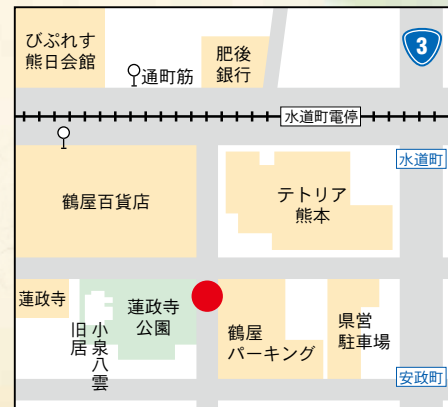
ところで、肥後藩はどうだったのでしょうか。藩校「時習館」の学風は、初代教授(学長)秋山玉山(1755年就任)の時は折衷学(色々な学派の長所をとって用いる学問)でした。しかし、2代目教授藪孤山(1766年就任)の時から朱子学に変わり、小楠が学んだ幕末のころも朱子学が中心でした。

※徳富蘆花(1868～1927)…

徳富一敬(横井小楠門人)の二男、本名健次郎。小説家。代表作『不如帰』。

※朱子(1130～1200)…

中国南宋の儒学者。朱子は尊称。



▲水道丁旧居跡



このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。



横井小楠 —その業績と生涯—

幕末の肥後藩には、3つの党派(主義主張を同じくする士族のグループ)がありました。時代にあった道徳的な政治の実現をめざす実学党、これまで守ってきた藩政を続けることに努める学校党、のちに尊王攘夷(天皇を尊び、外国との交流をこぼむ)を主張する勤王党の3つです。実学党を結成したのは横井小楠と同志たちでしたが、同志たちはどのような人たちで、実学とはどのようなものだったのでしょうか、また、党派間で、どのような問題が起こったのでしょうか。

5 実学の起こり

横井小楠とその同志は天保12年(1841)ごろから、自らの実践に重きを置く朱子学の研究会を始めました。メンバーは時習館時代からの友人で、家老※長岡監物(米田是容 家禄1万5千石)・下津休也(1千石)・元田永孚(550石)・荻昌國(250石)そして小楠(150石)の5人です。研究会のテキストには朱子学の内容のあらましを説明した入門書『近思録』を使いました。皆で読み合わせをしたり、既に朱子学を学んでいた長岡の講義を聞いたり、質疑討論を活発に行いました。議論が行き詰まった時には小楠がその解決のきっかけを出すこともありました。

研究会では会を重ねるごとに政治のあり方に眼を向けるようになり、道徳と政治を結びつけた「堯・舜・孔子※の道」、すなわち、中国古代の聖天子が行った徳政のような理想政治の実現をめざしました。これを真の実学とし、「実践すること」を重視しました。家老長岡家の屋敷など会場にした研究会の回数はだんだん増え、参加者も多くなりました。

当時の肥後藩は、深刻な財政難が続いている状況でした。そこで小楠は、財政改革論「時務策」※を立案して、藩政改革を求めました。また、時習館での教育についても実践を重視すべきで、字句の解釈や暗誦を主とする学風を改めるよう、藩に申し入れました。そして、これらの提言を次席家老の長岡監物を通して藩政に浸透させよう

としました。

これに対して、時習館(藩の学校)や藩政の現状を守ろうとする藩の主流「学校党」は、トップに筆頭家老の松井章之(家禄3万石)をすえ、長岡・小楠ら「実学党」の意見を取り入れようとしませんでした。こうして2つの党派は対立し、ついには、松井対長岡という家老同士の間での対立となりました。しかし、家老の役目は藩政の全体をまとめることです。長岡監物は藩政の混乱を避けるために、自ら家老職を辞職しました。このことがあって、監物宅での朱子学研究会は中止となりましたが、一方で、小楠の塾がスタートしました。

※家老…家臣の中で最高の地位にいる人。細川藩には松井・米田・有吉の世襲(子孫が家老を受け継ぐ)家老三家と一代家老が数人いた。米田家は家老に就任すると長岡監物を名乗る。

※堯・舜…いずれも古代中国の伝説上の聖天子(徳の高い帝王)。

※孔子(前551～前479)…

中国春秋時代の思想家、徳による政治を強調。儒学の祖。

※時務策…

上・下の身分の者がともに節約をする。貨殖(藩がお金を出し、財を増やすこと)をやめる。町方制度を整える。



▲米田是容の下屋敷(現必由館高校敷地)

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



幕末になると各地で、有名な学者や教育者が開いた「私塾」^{しじゅく}が急に増えました。兄の家に居候の身であった横井小楠も『小楠堂』や『四時軒』^{いそうけん}※という塾を開きます。「銀杏城下の寒士（貧乏な男）^{なんどう し げん}の家に、生命の灯が燃えはじめた」と語られる小楠の塾で、小楠は塾生にどのようなことを学ばせたのでしょうか。



◀現在は駐車場になって
いる小楠堂跡
(下通1丁目)

6 私塾「小楠堂」を開く

天保14年(1843)、小楠は雨戸はなく壁もぼろぼろの水道丁の自宅の一室(6畳の間)で私塾を開きました。小楠の塾は、初めて学問をする人のための塾ではなく、現在の大学のようなものでした。最初の入門者は徳富一敬や矢島直方など地方の郷土^{とくとみ いっけい なあかた ごうし}※の子で、後には肥後藩士や他藩の藩士も入門するようになり、塾生は次々に増え、6畳の間では狭くなってきました。

弘化3年(1846)、藩の役所に勤めていた小楠の兄時明^{とき あき しやうしん}が昇進し、横井家は相撲丁(現在の下通1丁目)に転居しました。新居での小楠の塾は2倍の広さになり、翌年には、敷地内に塾を新築して『小楠堂』と名付け、20余名の塾生が寄宿しました。『小楠堂』には小楠直筆^{じき ひつ}の掟(きまり)^{よ めい}が掲げられましたが、酒失に対する自戒(自分への注意)^{おきて かか しゅ しつ}でしようか、最後に「酒禁制(酒の禁止)の事」も加えられています。

さて、小楠は「学問」について「自分の心を日々活用すること(心の修行)^{しゆぎやう}」と言っています。そして、「古人(昔のすぐれた人)^{こ じん}」は、書物に頼ることなく、自分に具わっている能力を十分発揮して、毎日の生活の物事に心を配り、工夫した。例えば、親子兄弟はもちろん、多くの人と交わり、農民などとも親しく語り合ったりした。また、自然や動植物についても実際の場で理解することに努めた。その後、見聞きした事を確かめるために、関係の書物を読み、自分の実際の経

験や物事の仕組みなどに限りがないことに気付き、さらに勉学に励んだ。これが真の学問である。」と解説しています。

小楠は塾生に対して、「書物の上だけで物事を理解するのではなく、古人の学んだやり方を学ぶ真の学問をするように」と、励ましました。小楠の塾生に対する教育的態度は厳格でしたが、一方では、身分・年齢にかかわりなく、塾生一人ひとりの才能を大事にしたので、『小楠堂』の評判は高まりました。

※四時軒…安政2年(1855)に沼山津(熊本市)につくられた

※郷土…農村に昔から住んでいる武士や、農民で武士の待遇を受けている者

小楠堂の掟
・礼儀を正せ
・師範の指導に
・背くな
・禁酒せよ

学問は吾が心の修行

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



私塾「小楠堂」には、小楠の学風^{した}を慕ってさまざまな人たちが入門しました。小楠はこの塾で塾生たちにどのように接し、教導いたのでしょうか。塾生たちとの人間関係はどうだったのでしょうか。

7 小楠の指導と塾生たち

小楠の講義(授業)の特色は、聖人^{せいじん}※の行いや教えを常に現在の状態と比べ合わせ、実際の場で活用することを基本にすえたものでした。そこで、経伝^{けいでん}※だけでなく世の中の出来事に関して討論させ、その議題には、塾生が盆や正月に里帰りした時に見聞^{けんぶん}したもの(作物の出来具合や人々の生活ぶりなど)も取り入れていました。また、講義では特に大切なところでは、「繰り返し繰り返し、ご指導があり、理解できた」と言います。

小楠は、厳しい反面、たいそう親しみ深い所がありました。例えば、塾生たちとよく趣味の碁を打ちましたが、「待った待った」と手を取り合はんばかりに争うこともあり、また、剣術でも、まるで同僚のように互いに遠慮会釈なしに猛烈にたたき合うという調子でした。小楠の娘みやは「塾生の方々と父との親しみは普通の先生と弟子の関係ではなく、皆一 가족 のようで、塾生たちの家庭とも親しく交わっていました」と言っています。このように、小楠と塾生たちの絆^{きずな}はかたく、塾生は自分の信じる道を堂々と大手を振って進み、周囲の圧力が強ければ強いほど、一致協力^{いっし}し、師である小楠のために献身的に尽くしました。

小楠塾の塾生には優れた人物が多く、多士^{たし}済々^{せいせい}※でしたが、実学党と学校党との対立の中で、父の許しを得られず、母の助けを借りて、



▲横井小楠と維新群像

ひそ密かに通塾した肥後藩士もいました。一方、他藩からの塾生も多く、特に目立つのは柳河藩と越前藩でした。柳河では、「肥後学」と言えば、小楠の「実学」を指したといい、小楠はのちに越前藩士との交流も行っています。

平成12年4月、熊本城が間近に見える高橋公園に「横井小楠と維新群像」が建てられました。小楠を中央にして5人が並ぶブロンズ像で、台座には小楠高弟6人が配置されています。

※聖人…知識や徳にすぐれ、世の模範と仰がれるような人。

※経伝…儒教の経典(中国古代の聖人の教えを述べた書物)とその解釈書。

※多士済々…すぐれた人が多くいる様子。

このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠は吉田松陰※と熊本で親しく交際しています。松陰は一体どういう人だったのでしょうか。小楠と松陰の共通点は何だったのでしょうか。また、二人を結びつけたのは誰だったのでしょうか。

8 吉田松陰、小楠堂訪問

嘉永6年(1853)10月、吉田松陰は、長崎港に停泊中のロシアの軍艦に搭乗するため、長崎に向かいますが、その途中、熊本の小楠堂に立ち寄り、3日間、小楠と親しく話し合っています。松陰24歳、小楠45歳の時です。

小楠は、親交を結んでいた宮部鼎蔵※から、松陰は萩藩(現山口県)の藩士で、至誠(真心)をもって物事にあたり、また、実学を重んじて全体を理解する人だと聞いていて、諸国巡遊(嘉永4年に約半年間、小楠は日本国内21藩を巡り、財政の様子などを調べ、有名人と会見している)の際に萩を訪れましたが、松陰と面会することができませんでした。そこで、今度の松陰との出会いを大変喜び、ある1日は終日対話をしています。松陰は、その後、長崎に行きますが、軍艦はすでに退去したあとで、海外への渡航は果たせませんでした。

帰国後、小楠宛に出した手紙の中で、松陰は「小楠先生に萩に来ていただいて、藩士たちに天下の情勢とその対処について是非ご指導願います」と述べています。実現はしませんでした。松陰が小楠の学問や考え方を深く理解し、政治的实践へ大きな期待をしていたことがわかります。

安政元年(1854)正月、ペリー※がアメリカの軍艦を率いて再び来日した時、松陰は、再度海外渡航を計画、下田(現静岡県)でアメリカ



▲吉田松陰(山口県文書館提供)



▲宮部鼎蔵(御船町提供)

の艦船に乗ろうとして失敗し自首します。そのため萩藩の牢屋に入れられ、後に実家に幽閉(閉じ込められる)されましたが、同4年(1857)に「松下村塾」※を開き、高杉晋作※や伊藤博文※など多くの人々を育てました。しかし、同5年(1858)、老中(幕府の最高職)襲撃を計画した疑いで再び牢屋に入れられ、同6年(1859)、江戸に送られます。松陰は、取調べ中にも幕府の政策を批判したため、処刑されました。30歳の若さでした。

※吉田松陰(1830～1859) … 萩藩の教育者、山鹿流兵学師範(山鹿素行が考え出した戦の勝ち方を教える先生)。

※宮部鼎蔵(1820～1864) … 肥後藩の山鹿流兵学師範、尊王攘夷者で肥後勤王党のリーダー・上益城郡御船町出身。

※ペリー(1794～1858) … 米国東インド艦隊長官・日本に2度来航。

※松下村塾 … 萩にあった私塾・松陰が叔父の後を継いで塾長となる。

※高杉晋作(1839～1867) … 萩藩士・尊王攘夷者、奇兵隊を創設。

※伊藤博文(1841～1909) … 萩藩出身・政治家・初代総理大臣。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠の2歳上の兄・時明^{ときあき}が、安政元年(1854)7月、病死しました。享年48歳の若さでした。小楠は、その前年2月、肥後藩士小川吉十郎の娘・ひさと結婚するなど、祝い事がありましたが、人一倍慕^{した}っていた兄の死に悲嘆^{ひたん}に暮れました。兄はかねてから病弱であつたらしく、度々職を辞しています。小楠の、兄への看病ぶりは至れり尽くせりで、門弟たちを感動させたといいますが、一時は病状の回復した兄も、ついに帰らぬ人となったのです。

9 小楠の家督相続と絶交^{か とく ぜっ こう}

横井家では時明の死去にともない、跡継ぎが問題になりました。時明には長男・左平太^{さへいた}(10歳)がいましたが、幼少でしたので跡継ぎをすることができません。そこで小楠が兄の養子となって、横井家を継ぐことになりました。

ところで、当時の肥後藩では家禄を代々受け継ぐ世襲^{せしゅう}に制限を定め、知行取^{ちぎょうとり}※は旧知^{きゅうち}と新知^{しんち}とに分けられていました。

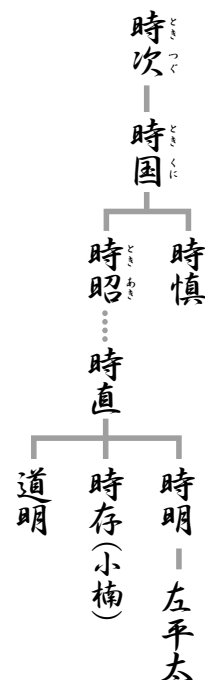
この制度は、第8代藩主細川重賢^{しげかた}の時にできたもので、家禄を相続する場合、第4代藩主光尚^{みつなお}まで(1649年)の家臣は旧知としてすべての相続を認めるが、それ以後に家臣になった者は新知とし、親(小楠の場合は兄)の手柄^{てがら}と跡継ぎをする者の才能が特に優れていないと家禄を減らすというものです。小楠の家系は新知でした。

小楠は文武両道にたけていましたが、肥後藩政の改革などを求めた実学党のリーダーということで、家禄が減られる心配もありました。幸いそのまま相続でき、小楠はさっそく肥後藩士として番方^{しゅえい}(軍事訓練や藩主の守衛など)に任じられました。

さてこのころ、小楠は米田是谷^{こめだ された}と絶交しています。小楠と4歳年下の米田が親しくなったのは藩校時習館で学んでいたころです。米田

肥後横井家略系図▶

細川忠利^{ただとし}(近世細川氏※第3代)が、寛永9年(1632)、肥後国54万石領主として熊本城に入城した際、細川氏の家臣であつた横井時次も肥後に入国し、肥後横井家の祖となりました。宝永4年(1707)、2代目時国の子時昭のとき分家し、家禄150石を賜りました。この時昭が横井小楠家の祖です。



は1万5千石の国家老であつたのに対し、小楠の横井家はわずか150石で、地位と境遇に大変差がありました。しかし、二人は、お互いの学問の深さと優れた考え方を尊重し合い、20年以上親しい交際が続いていました。ところが、学問の目標についての解釈の違いなどが原因で絶交し、実学党も米田派と横井派に分かれてしまいました。

※知行取 … 江戸時代、領主から一定の土地(知行地)を分け与えられた上級・中級家臣。横井小楠家も中級家臣であつた。

※近世細川氏 … 戦国時代から江戸時代までの細川氏のこと。

このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠は沼山津※に私塾四時軒を建てました。現在の横井小楠記念館です。「その昔、小楠が眺めた山と川そして空と雲、それらを通して、小楠とその家族及び門下生たちの魂がこの新しい四時軒で再会しているような気分になります。」(来館者ノート「旅日記」より)



10 沼山津転居と開国論

小楠は安政2年(1855)5月、47歳の時に沼山津に転居しました。当時の沼山津は、竹林に囲まれた農家が点在するさびしい村でしたが、塾からの眺めは素晴らしく四季折々の風景を楽しむことができました。小楠が開いた塾を「四時軒」(四時=四季)と名付けたのも、うなづけます。

小楠の沼山津転居の理由として、①苦しい家計 ②米田是容との絶交 ③一時的な隠棲※などが挙げられますが、友人への手紙に「この数年、種々の病災で家計が甚だ苦しい」とあり、経済上の問題が主な理由のようです。このころの肥後藩の財政は大変苦しく、藩士の年俸(1年間の給与)の実収入は2割以下だったといえます。そのため藩では、出費の多い城下を離れて在(農村)に移りたい者に「在宅願」を発行し、許可制にしました。小楠もこの制度を利用したと思われる。

さて、熱心に攘夷論を唱えていた小楠でしたが、沼山津に転居後、「開国論」を主張するようになりました。嘉永6年(1853)、日本に通商(貿易)を求めて、アメリカやロシアの軍艦が来航した時、小楠は「夷慮応接大意※」をつくり、その中で「開国はすべての人が守るべき道である。そのためのわが国の方針は、公平で正しい道を守る国とは通商を許すが、侵略を目的とする国とは交流を拒絶するの二つしかない。すべて拒絶するのは世界の信頼を失う」と語っています。

その時の事態の変化に応じて物事を取りさばく小楠にとって、思想の移り変わりはむしろ当然のことでしたが、急に開国論に豹変した小楠から離れていく同志や友人も多くいました。しかし、小楠は周辺の評価には少しも執着しませんでした。

ところで、小楠は安政3年に矢島つせ子と再婚しています。3年前に結婚したひさが急に亡くなったためです。矢島家は益城郡杉堂(現在の上益城郡益城町)在住の郷土で惣庄屋も務めた家柄でした。横井家に嫁いだつせ子は小楠のためによく尽くし、苦しい家計でしたが一家は円満でした。後に長男時雄と長女みやが生まれています。また、姉の順子※や久子※は小楠門下生の妻になっています。



▲妻 つせ子

※沼山津 … 江戸時代は沼山津村、のちに上益城郡秋津村となり、昭和29年に熊本市に合併。現在の熊本市沼山津。

※一時的な隠棲 … 将来自分を必要とする機会を待ち、俗世間を逃れて静かに住むこと。

※夷慮応接大意 … 外国人と応対する時の心がけ。

※順子 … 竹崎律次郎の妻、熊本女学校校長。

※久子 … 徳富一敬の妻、徳富蘇峰・蘆花の母。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



四時軒^{しじけん}が建つ沼山津で50歳を迎えた小楠^{えちぜんはん}は、越前藩の招きにより、福井に行きます。これが小楠と越前藩との交流の始まりですが、交流が決まるまでに約1年もかかっています。交流は1858年から1863年までの6年間で4回行われました。この間、小楠は福井あるいは江戸に居て、越前藩主などを補佐し、越前藩や幕府の政治改革に力を尽くしています。



▲小楠が福井に滞在したことを記す石碑
(福井市にある小楠の寄留先跡)

11 越前交流の始まり

安政5年(1858)3月、小楠は、越前(福井)藩主松平慶永^{まつだいらよしなが}(のち春嶽^{しゅんがく})※に招かれました。福井に着くと、賓師^{ひんし}※として迎えられ、50人扶持^{ふち}※(90石)の待遇を受けました。

さて、小楠と越前藩との関係は、9年前の嘉永2年(1849)10月、越前藩士三寺三作^{みつでらさんさく}が諸国巡遊の途中、熊本城下の小楠堂を訪れたことがきっかけです。三寺により小楠の名は福井に伝わりましたが、2年後の小楠の諸国巡遊でも小楠自ら20数日間福井に滞在して同地の有名な学者などと交わり、講演も行いました。その後、小楠は同藩の求めに応じて『学校問答書^{まじ}』※を著し、越前藩に贈っています。

ところで、当時の日本周辺には外国船がしきりに渡来していました。そのため日本海に面した越前藩では、特に海防^{かいほう}(海岸の防備)の重要性と文武振興の必要から、これらを達成するための見識^{けんしき}※のある人材を求めています。

藩主の慶永は小楠とは直接会ってはいませんでした。本藩での小楠の評判や『学校問答書』などを読んで、小楠の優れた考えや学問の深さを知り、小楠を越前藩に招く決意をしました。そして、安政4年(1857)3月、家臣の村田氏壽^{うじひさ}を熊本に派遣し、小楠を招きたいという気持ちを伝えました。小楠は藩主直々の招きと越前藩の知り合いの懇請^{こんせい}で越前行きを内諾^{ないだく}しました。そこで、同年8月、慶永は肥後藩主細川斉護^{なりもり}※に手紙を贈り、小楠招聘^{しょうへい}※についてお願いしました。

ところが、肥後藩は断りの返事を出しました。その理由として、「小楠は、才気はあるようだが、実学などの流派をつくり藩校の学風を批判している。政治についての考え方にも不安がある。」などを挙げています。これに対し、慶永や重臣たちは諦めず、斉護らに幾度も要請した結果、やっと肥後藩の承諾^{しょうだく}を得ることができたのです。

福井での初仕事は藩校明道館での講義や来訪者への応対などでしたが、藩主には江戸滞在のため会えませんでした。

※四時軒…当時の四時軒(2月号掲載の写真)は撤去され、昭和57年に現在の横井小楠記念館の一部として復元された。

※松平慶永(1828～90)…幕末の越前藩主(32万石)。のちに春嶽を名乗る。世界的視野に立って開国論を唱え、政事総裁職として朝廷と幕府が協力し合うように努めた。

※賓師…越前藩の先生としての待遇を受けた。

※1人扶持…1日玄米5合(1年間1.8石)を給与された。

※『学校問答書』…問答書の中で、小楠は「学校の設立は、君主や一門などの学問研究の心がけが大切であり、学問と政事を一致させる大本が立てば興すべきだ」と言っている。

※見識…すぐれた判断力やしっかりした考え。

※細川斉護(1804～60)…第12代藩主。幕末の時期に当り、藩財政の極度の困難、外国船渡来による浦賀(現在の神奈川県)等警備の幕命、藩内での実学党と学校党の対立などがあって苦心した。なお、三女男は松平慶永夫人。

※招聘…礼儀をつくして丁寧に招く。

このコーナーは、菅 秀隆^{すが ひでたか}さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

横井小楠 —その業績と生涯—



小楠は、1回目の福井交流では越前藩の藩校で藩士の教育などに携わりましたが、弟が亡くなったという報せを受け、福井に来た年の12月に熊本に帰ります。帰国後、百余日を過ごした小楠は、安政6年(1859)再び越前藩から招きを受けました。

第2回目の交流では越前藩の貿易を指導し、また、第3回目には藩政がよくまとまるように助言し、『国是※三論』を書いています。

12 越前藩の貿易指導

第2回目の福井入りで、小楠が最も力を注いだ仕事は殖産※と貿易です。越前藩では、橋本左内が数年前から外国貿易を主張し、三岡八郎※は積極的富国論を強調していました。

三岡は、小楠帰国中、四時軒に2か月滞在して小楠の指導を受け、長崎に向かいます。そこで貿易に関する情報収集や越前蔵屋敷の建築を行い、オランダ商館との貿易契約を結びました。藩内にはこの事業に反対する者もいましたが、三岡は各村を巡回し、大庄屋や老農に物産繁殖の計画を熱心に説明して、物産総会所を設けます。藩からはお金の出し入れを検査・監督する役人を付けただけで、運営は商人の自治に任せられます。布・生糸※・茶などの物産を取り扱いましたが、生糸が最も高値で取引できると考え、農家の仕事として生糸をつくる養蚕※を特に奨励しました。取引は予想以上に良好で、その結果、藩の財貨は常時50万両ほど蓄えることができたといえます。



▲小楠(右)と三岡八郎の像
(福井市 内堀公園内)

同年8月にかつての同志であった米田是容が病死(47歳)し、10月には友人で実学主義を唱えていた橋本左内が幕府を批判したとして処

刑(26歳)されました。さらに、12月、実母の危篤の報せに、小楠は急ぎ帰国しましたが、沼山津に着いた時は既に亡くなっていました。72歳でした。

万延元年(1860)2月、越前藩の招きで3回目の交流が始まり、福井で新たに越前藩主となった松平茂昭※と会いました。越前藩での小楠の信望は日に日に高まっていたが、藩内に保守と進歩の両派が発生し、対立するようになりました。そこで、小楠は拳藩一致※に力を尽くし、『国是三論』を著しました。その内容は「富国論(天)」「強兵論(地)」「士道(人)」で構成され、「富国論」では、国(藩)が積極的に外国貿易や殖産興業に取組み、土・民を豊かにすること、「強兵論」では、西欧諸国がアジア侵略を企てようとしている今日、わが国を防衛するには海軍を盛んにすること、「士道」では、文武の源は一つであり、精神修養が大切であることを論じています。

※国是…国(藩)の方針。

※殖産…産業を盛んにし、生産をふやすこと。

※三岡八郎(1829～1909)…別名 由利公正。小楠の門人。のちに明治新政府の基本方針『五箇条の御誓文』の原案をつくる。

※生糸…蚕の繭をときほぐして糸にしたもの。

※養蚕…蚕を飼って繭をつくらせる仕事。

※松平茂昭(1836～90)…越前藩主松平慶永が幕府より隠居・謹慎させられ、支藩系魚川藩主から越前藩主になる。

※拳藩一致…藩全体がひとつにまとまること。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。